



大館って 「ハチ公」のふるさとなんですね。



堀場 伸二 リポーター
(清水町)

若者の街、渋谷での待ち合わせ場所といえば、やはりハチ公前が定番ではないでしょうか。私も学生時代、よくハチ公前で待ち合わせましたが、転勤して来るまでそのふるさとが大館であることは全く知りませんでした。そんな私が今回、街のシンボルである「ハチ公」の現状について調べ、提言まで考えてみました。

「ホワイトガーデン協会」を訪ねて

今回「ハチ公」を核に地域おこしを行っている「ホワイトガーデン協会」の石川さんを訪ね、より詳しい話を伺うことができました。同協会によると「ハチ公」に関するイベントは主に年二回で、四月八日のハチ公慰霊祭と九月下旬のハチ公生誕祭(駅前フェスティバルと同時)です。「ハチ公」の故郷ということもあり、どちらかというと生誕祭の方がメインとのこと。どちらもJR大館駅前で開催され、市民の手によるいわば



「市民から盛り上がっておきたものではないと長編きしました」と石川さん。

手作りのイベントであります。こうした運動も市民の中で盛り上がり、市民の手でやっていかないと長続きしないとのこと、行政からの援助は一切ないとのこと。やはり「ハチ公」は市民一人ひとりのものであって、市民のシンボルであることが良く分かりました。

こんな提言を まとめました。

そこで、私なりに「ハチ公」に関する提言をまとめました。どれも実現性の可否よりも「ハチ公」をより楽しく、より身近なものにしたいという願望から考え出したものです。

①「ハチ公」の名を冠したストーリーを作るのはどうだろうか。例えば、駅前から大町へ伸びる



ハチ公キャラクターはファクス送り状や封筒、公共スペースまで登場しています。

②全国の繁華街の待ち合わせスポットに「ハチ公」像を送るのはどうだろうか。やはり待ち合わせといえは「ハチ公」というイメージは強く「ハチ公」が生まれた大館からなら、第二、第三の「ハチ公」を世に送り出してもおかしくないだろう。

街の中心道路を「ハチ公通り」とし、途中途中で「ハチ公」の像などを散りばめ、身近なものにするのである。そうすれば街のシンボルにもなり、観光客も訪れやすくなるのではないかと。

うだろうか。地元大館市民はもとより全国から募金を集め、広く動物愛護に役立てるのである。例えば、自然災害などでは人命救助が優先され、動物は後回しにされることが多い。そのため、何も分らずに主人の帰りをひたすら待つという不幸なケースもあり得る。そうした動物を救うことを目的とすることで「ハチ公」は主人の帰りを待つ悲しい犬、というイメージにも合い、人々の共感を得やすいのではないかと。

ふるさと大館を愛そう

大館市としても「ハチ公」を観光のシンボルとして捉え、キャラクターデザイン化した封筒やファクス送り状などに活用しているとのことでした。ただ、市にも予算の問題があつて、これ以上のこと期待するのは困難であり、多くは私たち一人ひとりの肩にかかっていると思います。この広報を読まれた皆さんもいいアイデアがあれば、どんどん積極的に発言してください。この街をもっと良くしていきたい、もっと活気あふれる街にしたい、とだれもが共通して思っていることでしょうか。「ハチ公」をきっかけに市民一人ひとりが自分たちの街を考え、そして何かを作っていくのは、市民一人ひとりの大館を愛するパワーであると思います。